
ああ我らが愛しの馬鹿君

T m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ああ我らが愛しの馬鹿君

【Zマーク】

Z6667M

【作者名】

Tm

【あらすじ】

いつかの時代の、どこの国も、どこの王子様のいつものやりとり。本日も我らが王子は『機嫌悪しくトンデモ発言』がましましておられます。我々一同、いつも通り、『また馬鹿なこと言い出したよこの王子様は……』と思いながら、馬鹿王子を温かい目で見守っています。今日もそんな日常からほんの少し歯車のずれた日の、お話。

(前書き)

この作品は御馬鹿要素が多分に含まれます。用法用量を守り正しくお読みください。

昔々、それはもう今から数えると遠くなつたが如き、一いじり想像もつかないほど遠い遠いかの地に、一人の王子様がありました。

王子様の御国はとつても独裁国家で、といつか王子様ご自身がほとんどない独裁者で、國の全てが王子様のご機嫌一つで右往左往する、そんな従順な犬のよつたな國家体制をとつておりました。

それというのも王子様ご自身が他に類を見ないほどの俺様的ご気性の持ち主でいらしたので、気がついたときには時既に遅く、國中のもの全てが王子への忠誠を誓わされていたのです。

もちろん、ただ俺様なだけの独裁者など、かるべくあしらわれて終わりです。世の中そんなにスイーツ（笑）のようにには出来ておりません。

ですが王子様と来たら幾つになつても短氣で我慢で、世の中なんでも自分の思うとおりにいくと思つていて、その癖うまくいかないとへそを曲げたり怒鳴り散らしたり逃げたりするのです。

そんなやんちゃ小僧も真っ青で逃げ出すよつた王子様の世話の焼けっふりに国民みんなが『あらあらまあまあ』と優しくせざるを得なかつたのです。つまりは国民みんなが王子様に優しかつたのです。さて、そんな事など露知らず、今日も今日とて王子様は傍若無人つぶりを發揮します。みんなはいつも通り、『また馬鹿なこと言い出したよこの王子様は……』と思いながら、馬鹿王子を温かい田で見守っています。

今日もそんな日常からほんの少し歯車のずれた日の、お話を。

「よーし、今日はプリンでプール作ろうぜー。」

朝食のプリンの最後の一匙を食べた後に、王子様は仰いました。

使用者共々、『また始まつた』と、暖かい笑みがこぼれます。馬鹿すぎると、逆に何を言つたところで可愛く見える典型です。ところが、使用者のうちの一人、王子の側近のキールが、にこりとも笑わず咳きました。

「殿下、差し出がましいことを申し上げますが、プリンで、ではなく、プリンの、ではないかと」

「ん？ プリンでプール作るんだろ？ プリンの？ 一緒にじゃないか？」

王子様はキールの訂正の意味も飲めていないようです。馬鹿です。でもみんな、そんな王子様に萌え萌えしています。キールはなおも、言いました。

「わかりました。ではその辺は後ほどきつちりご理解頂くとして、殿下のお言葉にはあまりにも現実味が欠けておられるかと、存じ上げます」

「ゲンジツミ……調味料か？ 作るのは俺じゃなくて、パティシエのポーラだ！ 心配するな！」

みんな、心の中で、『お前の脳みそが一番心配なんだよ、このお馬鹿！』と叫びました。愛ある叫びです。それでもキールだけは相変わらず表情をぴくりとも変えないまま、なおも言いました。

「もう一つ申し上げてもよろしいでしょうか」

「ん？ 駄目だ！」

「はい、では……え？」

「ん？」

「え？」

空氣も読めないお馬鹿王子です。いちいち伺つていたところで聞くわけがありません。キールは仕方なく、聞かなかつたことにしました。オホンと一つ咳払いをして、場を持ち直します。

「ええと、はい……よしんばプリンをプールに出来るほど作つたところで、誰がそれを食べき」

「そういえばプリン体つてプリンに入つてるのか？…違うのか？…」

独裁者なので、人の話も聞きません。その上人の話を聞かないくせに、にわか知識で思い込んで突つ走ります。

「プリン体って取りすぎたら駄目なんだろ！　じゃあプリンでプリン作つたら、ある意味死刑場だな！　あれ？　俺死刑？」

ここでキールが、初めて表情に変化を見せました。心なしか、疲労が目の端に浮かんでいるようです。溜息をつきたくて仕方ないのか、頬がひくついていました。

さて、どうしましょう。ここまでくると、粘つていたキールがいささか気の毒です。見かねた使用人のうちの一人が、キールの代わりに王子様に申し出ました。

「殿下。誰も死刑になどなりたくはありませんし、罪を犯したものもおりません。ましてや殿下が死刑になどと、」

「ギロチンを持つてこい！」

「どうしてそうなるんですか——っ！」

王子様の突飛といえばあまりに突飛過ぎる発言に、その場にいたもの全員が目玉も飛び出さんばかりに驚きました。

一体何が気に障つたというのでしょうか。先ほどの使用人は、とんでもないタイミングで声をかけてしまつたと、全身血の気が引いたように真っ青です。

王子様は清清しい朝を迎えたかのような爽やかな笑顔で、言いました。

「とりあえず死刑になつとかなきやなー！プリン体で死んでも困るし！」

最早何を言つているか誰にもわからないほどの次元で、王子様は突つ走つていました。とりあえずなんらかの予防策に（例え本末転倒とはいえ）死んでおこうないと、それだけはわかりました。

けれど駄目です。いけません。王子様が死んでしまつたら、一体誰がこの国を支えるというのでしょうか。

というか、いいえ、訂正。この国は一体誰を支えていけばいいのでしょうか。今まで、総力を挙げてこの馬鹿王子を支えてきたという

のに、それがなくなってしまっては生き甲斐をなくしてしまいます。さあ、困ったことになりました。一度言つたらこでも意見を曲げない、もとい、人の話を聞かない王子は、なんとかしないと本当に首を切つてしまつでしょう。切つてしまつた後にどうするかなんて、考えていいくせに！

さすがの使用人達も、今回ばかりは萌え萌えしていられません。どうやって王子様を丸め込もうか、王子様を除いたその場の全員が全力で思索し始めました。そして一人の老人が、王子様に語りかけました。

「殿下、首を切つたらプリンは食べられません」

「でもそのままでプリンを食べたらプリン体の過剰摂取で死ぬだろ？」

「う~」

馬鹿の癖に変に言葉を知つてゐるものだから、手に負えません。また若いメイドが、語り掛けました。

「でも殿下、そもそもプリン体はプリンにはそう沢山含まれているものではなく、それに過剰摂取したところで引き起しがられる作用は痛風などの」

「じゃあなんでプリン体つて言つんだ？ プリンだからだろ？」

ああもう聞き分けの無い！ ああ言えばこう言つづ~

皆、段々と苛々してきました。いうこう手合には無視しておけばいいのですが、無視すると何をやらかすかわからな上、一国の王子様を無視するなんて無礼は誰も働けません。一体どうしたらこの馬鹿王子に死刑という名の自殺を止めさせて、プリンのフルーツを諦めさせる事ができるのでしょうか。

しかし、その場者が一様にして眉間に皺を寄せ始めたそのとき、キールが申し出ました。

「わかりました。では処刑人は誰にやらせましょう」

「キールさん？」

なんとまあ、一番懸命になつて引き止めるはずのキールさんが、さらつと王子様の処刑を肯定してしまいました。みんなが目を丸く

して呆気に取られる中、王子様だけが田をキラキラと輝かせて喜びました。

「よし！ ジャあ、早速ギロチンと処刑人の用意を…」

「なりません」

「んん？！ なんでだ！」

先ほどの発言から手のひらを返したような返答に、さしもの王子様も頭に幾つも疑問符を浮かべました。キールさんはただただ、しれっと知らん振りをしています。

「私は、一体この国の誰が王子様を処刑できるのでしょうかとお尋ねしたのです。処刑人風情が一国の王子を処刑できるとお思いですか？」殿下

「む……それも、そうだな！ 僕は高貴な身の上であるからして、誰にも手が出せんのだ！ ひれ伏せ愚民共！」

「ひれ伏すのは大いに構いませんがそれでは殿下の首をはねる事ができません」

「む…」

「む… ジヤありません、このお馬鹿。難しい顔を作つたつて、脳みそ空っぽなのは一目瞭然なんですからね。」

見事王子の勢いをせき止めた頭脳派キールさん。王子の隙に、すかさず置み掛けます。

「王子、何も一度死ぬ事はありません」

「なんでだ！ 死なないと僕はプリンを一生食べられない！」

なんだかふりふり怒つてこらつしゃいますが、微妙に論点がずれてきていますよ王子様。

「ですから、プリンのプリン体で死ぬことを防止する為に死ぬよりも、プリン体に耐えられる身体を作ればいいわけです」

「んん？ 王子様に限らず、その場の皆さん（キールさんを外して）が、疑問符をひょこひょこ頭の上に掲げました。

だんだん何の話をしているのかすら解らなくなつてくるほどちんぶんかんぶんの会話。ついていけるキールさんあたり、さすが王子

様の側近とされるだけあります。

とにかくみんなは思いました。キールさんがんばって！ なんでもいいからあの馬鹿に思い知らせてやつて！

「ほんと一つ咳払い、キールさん。まあ不思議、なんだか何をしても、頭が良さそうに見えてきます。

「身体をプリン体に慣らすのです、殿下。毎日のおやつをプリンにして、少しづつプリン体に耐えられる身体作りをしていくのです」

「おお！ なるほど！ 頭いいなお前！」

会話自体はさほど頭のよろしい会話とはいえない、むしろイカれつつあるような内容なのですが、王子様はキールさんの提案にいたく感激したようです。

王子、プリン好きですもんね。毎日食べられたら、嬉しいですよね。よかつたね、王子。

「よし！ プリンを持つてこい！」

「駄目です」

「なんでだよ！」

王子様は顔を真っ赤にしてお怒りになりました。アラ不思議、もう何をしててもお馬鹿にしか見えません。

「今日のぶんのプリンはたった今食べ終えられましたので、また明日です」

「ええー！」

「駄目なものは駄目です。プリンは一日一個まで！」

わざと言つていてる事が微妙に食い違つていますよキールさんは、もう誰も言ひはしません。王子様はそんな事にも気付かずにしてしゅんとなり、素直にプリンを諦めました。

「……わかった。今日は諦める。けど俺はいつか絶対プリンのペールを造つて見せるからな！」

「その意氣です、殿下。我々も総力を挙げて、お手伝いいたします」

「つむー。よきに計らいえよ、わが愚民ども！」

はー、我が愚殿下。皆さん、心のうちは隠したまま、ほつとして

恭しく頭をたれました。ただその心のうちに、少しだけ、『その心意氣をもう少し違うところにも發揮していただきたいものだ』と虚しやも伴っていたのでした。

それから幾日かが経ち、毎日おやつにプリンを出されることに飽きた王子様は、次第にプリンのプールの事もすっかり脳内初期化させてしまい、また次の要らない懸念を家臣たちに投下しては右往左往するのでした。

いつして馬鹿王子の日常は、いつもいつも波乱万丈なのか平穏なのかわからぬ日々で埋め尽くされていました。

それでもどうして王子が王子と呼ばれるのか。それは国民みんなが、王子様の事を大好きだからです。馬鹿な子ほど可愛い。これは、世界中のどの王子様やお姫様よりも、国民に愛され続けた王子様のお話です。

怒りや困惑はあっても、最後にはみんなが笑って明日を迎える。目の醒めるような口マンは無くとも、心を揺さぶる日常がある。そんな平和で暢気で地味な小国が、この世界のどこかには、あつたのでした。

(後書き)

読んでくださりありがとうございます。なろうで初投稿が馬鹿王
子……。初っ端からかまってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6667m/>

ああ我らが愛しの馬鹿君

2010年10月8日12時29分発行